

現代経済学の基礎科目の学習意義

佐野洋史 Hiroshi Sano
滋賀大学 経済学部 / 准教授

1. 「現代経済学基礎」の開講経緯

私は平成24年1月に滋賀大学経済学部に着任し、翌年の平成25年度から本学部1年生を対象とした「現代経済学基礎」を担当している。本エッセイでは、当該科目が開講された経緯、講義内容、成果、意義について報告したい。

本学部では、本学が独立行政法人化した平成16年度より選択必修科目としてマイクロ経済学A、マイクロ経済学B、マクロ経済学A、マクロ経済学B(以下、マイクロA、マイクロB、マクロA、マクロB)を開講している。これら4科目はマイクロ経済学とマクロ経済学の基礎的な専門用語、概念、理論モデル、分析手法などを体系的に修得することを目的としている。マイクロ・マクロともAとBの講義内容は連続しており、AよりもBの方が難しい内容となっている。

これらの選択必修科目(特にマイクロA・B)において、開講以降、毎年入学生の単位修得率(単位修得者数/入学生総数)や合格率(単位修得者数/受講者数)が低いことが問題視されていた。そこで平成24年度より、1年生を対象に必修科目としてマイクロ・マクロ経済学の基礎的な専門用語・概念などをより平易に解説する「現代経済学基礎」が開講された。本学は春・秋の2学期制であるが、1年生はまず当該科目を春学期に受講し、もし不合格となれば秋学期に再度受講する。当該科目の単位修得が3年生への進級要件であり、1・2年生の春・秋学期の計4回の開講中に修得できなければ3年生へ進級できない。これにより、1年生秋学期から受講できるマイクロA・マクロAと2年生春学期から受講できるマイクロB・マクロBに対する理解力を高め、単位修得率や合格率を向上させることが期待された。

2. 現代経済学基礎の講義内容

現代経済学基礎の講義内容は、マンキュー(2008)やマンキュー(2014)を参考に構成された。同書を参考書に指定し、学生が予習・復習しやすいようにした。

平成28年度の講義内容は、以下の通りである。

(1) 経済学とはどんな学問なのか、(2) 現代経済学の(マンキューの)十大原理、(3) 相互依存と交易からの利益、(4) 市場における需要と供給の作用、(5) 完全競争市場の効率性(余剰の概念)、(6) 市場と政府の政策の考察、(7) 市場の失敗(市場支配力、公共財)、(8) 市場の失敗(外部性)、(9) 市場の失敗(リスクと非対称情報)、(10) GDP、(11) その他のマクロ経済指標(消費者物価指数、インフレ率など)、(12) 貯蓄・投資と金融システム、(13) 経済成長

講義内容のうち、(7)や(9)は同書に含まれないため、マンキュー(2013)とマンキュー(2005)を参考にした。講義はパワーポイントや板書で行い、パワーポイントなどで作成した資料を毎回受講生に配布した。

定期試験問題は、平成25年度以降は主に選択問題と若干の記述問題を出题している。平成28年度春学期は27問の選択問題と小問4問で構成される記述問題を出题した。選択問題の問1と記述問題の小問1を以下に例示する。

【選択問題1】次の選択肢のうち、「消費」に該当するものを一つ選べ。

①持家に住むこと、②果物屋が卸売市場からすいかを仕入れること、③スーパーでレジ打ちのアルバイトをすること、④彦根市から生活保護費を受給すること

【記述問題：小問1】(縦軸を価格、横軸を数量とし、需要曲線D、供給曲線S、価格規制の上限を表す水平線P'を描いた図を示して、) 価格規制実施後の取引量Qを、解答欄の図に書き入れよ。

定期試験の過去問題とその解答は滋賀大学学習管理システム(SULMS)のウェブサイトにアップロードし、受講生が定期試験対策に利用できるようにした。

表1. 現代経済学基礎の開講前(平成22・23年度)と開講後(平成24・25年度)の入学生の単位修得状況

入 学 年	科 目 名	マイクロ経済学A	マイクロ経済学B	マクロ経済学A	マクロ経済学B
	受 講 時 期	1年生秋学期	2年生春学期	1年生秋学期	2年生春学期
	入学生総数	単位修得者数(率:%)			
平成22年度	537人	97人(18.1%)	42人(7.8%)	401人(74.7%)	416人(77.5%)
平成23年度	535人	129人(24.1%)	62人(11.6%)	413人(77.2%)	325人(60.7%)
平成24年度	540人	226人(41.9%)	80人(14.8%)	442人(81.9%)	399人(73.9%)
平成25年度	524人	307人(58.6%)	—	401人(76.5%)	—

表2. 現代経済学基礎の合否別、マイクロ・マクロ経済学の合格状況(平成27年度入学生)

現代経済学基礎 (1年生春学期)	マイクロ経済学A (1年生秋学期)		マイクロ経済学B (2年生春学期)		マクロ経済学A (1年生秋学期)		マクロ経済学B (2年生春学期)	
	合格	不合格	合格	不合格	合格	不合格	合格	不合格
合 格	310人 82.2%	67人 17.8%	60人 54.6%	50人 45.5%	424人 92.0%	37人 8.0%	348人 85.3%	60人 14.7%
不 合 格	31人 52.5%	28人 47.5%	2人 16.7%	10人 83.3%	55人 76.4%	17人 23.6%	30人 53.6%	26人 46.4%
合格率の差	29.7%		37.9%		15.6%		31.7%	

3. 現代経済学基礎、マイクロ経済学、マクロ経済学の単位修得状況

平成24～28年度入学生の1年生春学期における現代経済学基礎の単位修得率は、順に81.4%(437/537)、61.4%(320/521)、85.8%(459/535)、85.9%(463/539)、88.0%(483/549)であった。試験欠席者を含めて概ね80%以上の修得率であるが、平成25年度のみ61%と低かった。これは、平成24年度の定期試験が選択問題のみであったものを、平成25年度から新たに記述問題を加えたことによると考えられる(当該年度のみ、選択問題の難易度が高かった可能性もある)。平成26年度以降は、受講生が過去の記述問題を見て試験対策を行うことができたこともあり、単位修得率は回復している。

それでは、現代経済学基礎の開講により、マイクロA・BとマクロA・Bの単位修得率に変化が現れたのかを概観したい。表1は、現代経済学基礎の開講前である平成22、23年度と開講後の平成24、25年度における、各年度入学生のマイクロA・BとマクロA・Bの単位修得状況である(平成25年度入学生のマイクロB・マクロBはデータ未入手のため不明)。マイクロAとマクロAは1年生秋学期、マイクロBとマクロBは2年生春学期の修

得者数・率(%)である。マクロA・BとマイクロBの修得率は現代経済学基礎の開講前後であまり変わらないものの、マイクロAの単位修得率は大幅に上昇したことがわかる。

表2は、平成27年度入学生の1年生春学期における現代経済学基礎の合格・不合格別に、1年生秋学期と2年生春学期に受講したマイクロA・B、マクロA・Bの合格者数・率(%)を示している。1年生春学期の現代経済学基礎の合否別による各科目の合格率の差は、マイクロAが29.7ポイント(82.2-52.5)、マイクロBが37.9ポイント(54.6-16.7)、マクロAが15.6ポイント(92.0-76.4)、マクロBが31.7ポイント(85.3-53.6)であった。すなわち、現代経済学基礎を初回で合格した学生の方が、不合格であった学生よりもマイクロA・BとマクロA・Bをそれぞれ初回で合格する率が高いことがわかる。

4. 現代経済学基礎の学習意義と今後の課題

表1と表2の結果より、現代経済学基礎を受講することによってマイクロAの単位修得率が向上し、当該科目を修得することによってマイクロA・BとマクロA・Bの合格率が改善される可能性が示された。これらは厳

密な検証とは言えないものの、現代経済学基礎は学生
のマイクロ・マクロ経済学の修得を促す基礎科目と
して意義があると評価できる。

特に現代経済学基礎の開講・修得前後でマイクロA
の単位修得率やマイクロA・Bの合格率に違いが見られ
るのは、当該科目の講義内容がマクロ経済学よりも
マイクロ経済学の基礎学習に多くを割いているためだ
ろう。また、当該科目の開講前からマクロBの修得率
が高かったのは、本学部の卒業要件が関係している。
本学部ではマイクロ、マクロ、統計学、簿記・会計の4
つの選択必修科目がAとBに分かれ、うち2つでAとB
の両方を修得しなければ卒業できなかった(今年度よ
り要件変更)。マクロAが他の選択必修科目よりも比
較的修得しやすかったため、マクロBの受講者が多
かったと推察される。

当該科目に関する今後の課題としては、講義内容
が一部マイクロ・マクロAと重複していること、ミクロ・
マクロの単位を修得できても当該科目が不合格とな
り進級できない学生がいることなどが挙げられる。当
該科目の学習意義を更に高めるため、今後も講義内
容や定期試験の内容、講義方法などについて検討・
改善していきたい。

【付記】

本稿の執筆にあたり、本学部経済学科教員の吉川
英治氏と本学学務課教務係の多喜千浩氏よりデー
タ資料の提供を受けた。また、当該科目の講義は平
成24年度より経済学科教員の中野桂氏、金秉基氏、
吉川英治氏、松田有加氏、石井利江子氏と著者で担
当し、講義資料の印刷や定期試験問題・解答の管理
は本学の陵水学習教育支援室の職員が担当してい
る。各位に厚くお礼を申し上げたい。なお、本稿に残
された誤りは、全て著者の責任である。

文献

- マンキュー N.G.(2005)『マンキュー経済学II マクロ編(第2版)』東洋経済新報社.
- マンキュー N.G.(2008)『マンキュー入門経済学』東洋経済新報社.
- マンキュー N.G.(2013)『マンキュー経済学I ミクロ編(第3版)』東洋経済新報社.
- マンキュー N.G.(2014)『マンキュー入門経済学(第2版)』東洋経済新報社.

